2011 年度　修了

2 重集団随伴性における協力行動の検討

命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助額領域
障害・行動分析クラスター
川田　峻也

Key words: 2 重集団随伴性、相互依存型集団随伴性、協力行動

研究の目的　本研究は、2 重集団随伴性による介入を行い、協力行動に及ぼす影響について,ゲーム課題を用いて検討した。2 重集団随伴性とは、集団内の相互依存型集団随伴性と集団間の相互依存型の集団随伴性の組み合わせである。**研究計画**　条件交替デザインを用いた。**場面**　大学施設内の実験室にて実施した。**参加者**　2 名 1 組に分かれた大学院生 4 名であった。**手続き**　実験室にて、ゲーム課題を行った。課題は 2 人 1 組で、レゴブロックを運ぶ役（役割 A）と運ばれたブロックを色ごとに仕分ける役（役割 B）とに分担して行うゲームである。1 回のゲームの時間は 2 分であった。得点は役割 B のみに加算された。2 名の参加者は役割を交替しながら繰り返し行った。**独立変数の操作**　集団随伴性から 2 重集団随伴性への変化、両グループの作業空間の同期、教示を独立変数とした。**行動の指標**　ゲームを行うパートナーがより多くのブロックを仕分けられるようにする行動を協力行動の指標とした。**結果**　介入条件において集団内の協力行動が増加した。また、集団内のパフォーマンスの推移は連動していた。**結論**　集団内の協力行動の増加に、2 重集団随伴性の適用が有効であった。集団内の最初の協力行動は、ペアの相手の協力行動の確立操作となることが示唆される。また、集団内の協力行動の維持は、負の強化であると考えられる。**研究の意義**　行動分析学において、協力と競争は対立概念として扱われてきた。本研究は、初めて両者が内包する環境設定について初めて検討した研究である。また、集団随伴性の枠組みにおいて、集団内の相互依存型随伴性だけでなく、集団間の相互依存型随伴性も存在する環境設定について検討した最初の研究である。さらに、行動分析学において、外集団が集団内の協力行動の変数となり得ることを示す最初の研究である。よって、本研究が行動分析学における新たなパラダイムとなることが期待される。